

矢板のお城めぐり

……①

現在NHKで放送中の「真田丸」、小田原城も落城し、やっとならない太平の世が訪れるかと思いきや、秀吉の野望は海外へと向けられていきます。

それでは、その当時の矢板は、一体どんな状況にあったのでしょうか。今回は、それを城郭を中心に探ってみましょう。

戦いに明け暮れた戦国時代、その頃の矢板には、川崎城を本城として、それを取り囲むように十六の支城がありました。その支城は、左下図のとおりです。ただし、この中には櫓を組んだだけの物見小屋やのろし台も含まれています。

しかし、どうしてこんなに堅固な守りをする必要があったのでしょうか？それは那須家に對抗する必要があったためです。

那須家は、宇都宮家を滅ぼして下野の国の覇者となるために、虎視眈々とその機会を伺っていました。これに真っ向から対抗したのが塩谷家です。那須記によりますと、塩那の戦いは実に三十数回に及

んでいます。特に最前線にあった沢村城と乙畑城では、激しい戦闘が繰り返されていました。このために、本家宇都宮家からたくさんの援軍が矢板に派遣されてきました。こうした武将たちは、やがて塩谷家が滅びますと、そのままの地に土着しました。このため、本市は人口の割には苗字の種類が多く、しかも珍しいものが多いと言われています。

しかし、こんなにたくさんあった城も、やがて文禄四（一五九五）年に川崎城が廃城になり、更には徳川秀忠による「二国一城令」によって、ことごとく取り壊されてしまいました。以後のやっとならない太平の世が続くことになりました。

次回からは、これらの中から主な城を紹介していきます。ご期待ください。

（矢板市史より）



学校平？く名前の由来

高原山の東麓に「学校平」と呼ばれるところがあります。ちょうど「山の駅たかはら」が建っている一帯のことです。ここに、明治三十年代後半に、「私立奥村尋常小学校」が建てられました。床面積は約八〇平方メートルで、生徒数は五十余名もおりました。

学校を建てたのは、旧南那須町出身の「奥村健助」で、奥村は薪炭会社を設立して職人を雇い、この地で大々的に炭焼きを始めました。職人たちは炭焼き窯の近くに小屋を立て、家族と共に生活をしておりました。

ここには当然子どもたちがおりましたので、奥村はこの子どもたちのために学校を建てたという訳です。

先生は二人で主任が天野寿三郎、そして代用教員が小野

崎清三郎でした。

また、現在の県道56号線、通称八方ヶ原観光道路は、元々「奥村道」と呼ばれ、奥村健助が私財を投じて開削したものです。（実際の学校の位置は、山の駅たかはらの西北一〇〇メートルほどの地と伝えられています。）

ここで焼かれた炭は矢板駅まで運ばれ、各地に出荷されていきました。

しかし、明治四十四年四月六日に発生した矢板町の大火によって、一万数千俵が消失してしまい、薪炭会社は倒産、小学校も閉校に追い込まれてしまいました。

（矢板市史より）

奥村尋常小学校跡入口



学校平駐車場

（編集後記）

新しいコンセプトのかわら版をお届けします。矢板について皆さんが知りたいこと、知ってほしいこと、市内のこんな人、あんな場所等を記事にして、皆さんにお知らせします。市民目線でもらえた矢板の良さを2カ月一度ご紹介しますので、ご期待ください。